

# 教誨師 償いへ導く対話

宗教家として受刑者や死刑囚に教えを諭す「教誨師」。全国の矯正施設に1800人余りが通い、犯した罪を償う人たちと対話をつづける。教誨師自身が「塀の中」で何を見て、何を感じているのか取材した。

府中刑務所で受刑者(手前)に対してミサを行うハビエル・ガルダさん  
=8月、東京都府中市(画像の一部を加工しています)



20年間にわたり、東京拘置所(東京都葛飾区)に通い続けるスペイン人の教誨師がいる。聖イグナチオ教会協力司祭の神父ハビエル・ガルダさん(89)。日本語は堪能で、これまで6人の死刑囚と向き合ってきた。

## 「塀の中」受刑者や死刑囚諭す

前、刑執行を直後に控えた死刑囚にミサを執り行ったときのことだという。いつか執行の日が来ると分かっているも、対話を重ねた人物が今まさに死ぬという現実には「ショックだった」。

驚くほど落ち着いていた死刑囚。ガルダさんが「(刑確定から執行まで)早かったですね」と声を掛けると、ほほ笑んだ。最後に「悪いことをした。申し訳ない。許して

### 東京・89歳のスペイン人神父

ほしい」と話し、顔に布をかぶせられ、刑場へ連れて行かれた。約30分後、遺体となった死刑囚と対面。拘置所幹部らと一緒に献花した。

「旅立つときの心情安定のため」(法務省幹部)との理由で、死刑囚は希望すれば執行直前に教誨を受けられる。ガルダさんが長年の経験の中で担当したのはこの一回だけだという。

1958年、宣教師として

## 考える時間「人間として成長」



取材に応じるハビエル・ガルダさん  
9月、東京都千代田区

来日。両親が明治時代、新婚旅行で訪れた日本に縁を感じていた。スペインで出所者の支援などに取り組んだ兄に倣って、教誨師の仕事を引き受けた。

東京拘置所には2000年から月1回、足を運ぶ。死刑囚と対面するのは6畳ほどのキリスト教専用の教誨室。時間は1人30分。刑務官が立ち会ったものの、面会室のように死刑囚との間を仕切るアクリル板はない。

現在、数人の死刑囚を受け持つ。ガルダさんが対話の一端を明かした。一人は哲学が好きで「本を読んで感動し

ても、人と話せないことがつらい」と言う。別の一人は自身を一種の灯台に例え「私の歩んだ道を歩まないよう示すことが、私の生きる道だ」と語った。

「彼らは人間として成長している」とガルダさん。その理由を「死刑囚には考える時間があり、深いところの自分」と仲良く話すから」と説明し、これを「充実した沈黙」と表現する。ただ、「浅いと

ころの自分」としか話せない死刑囚は罪と向き合えず、境目に不満を述べるといふ。「沈黙」の程度にも注意が必要と考えている。家族と疎

遠で面会者がいない死刑囚も多い。このため「アウトプットの機会がなく、内にこもり、自己弁護と憎しみを生んでしまっている」と高野で最も悪いガルダさんが通い続けるのは、貴重な会話の機会を奪わないようにするためだ。

死刑制度には賛成できない。「正義の名の下に、改心した人の命を奪う必要はあるのか。政府がリーダーシップを取って、まずは議論するべきだ」。一方で「反対派の一部は、執行の暴力性をセンセーショナルに強調し過ぎてい

る」と感じており、「死刑という『報復』によって被害者遺族が本心に救われるのかという視点で考えてみたかどうか」と提案する。

死刑囚以外にも、府中刑務所(東京都府中市)でスペイン語と英語を理解する外国人受刑者を担当する。8月下旬、ガルダさんは所内の蒸し暑い教誨室で、2回に分けてミサを行った。この日の参加者は、30〜50代の男性受刑者計9人。国籍はスペイン、メキシコ、ルーマニアとさまざま

だ。普段、穏やかに話すガルダさんが何倍もの声を張り上げて聖書を読み、賛美歌を歌った。

### 宗教通じ心情を安定

教誨師は、仏教や神道、キリスト教といった宗教を通じて活動する。全国教誨師連盟の資料によ

ボランティ アで明治から

つた。監獄法に代わる現在の刑事収容施設は「施設の長は、収容者が宗教上の教誨を受けられることができる機会を設けるよう努めなければいけない」と規定しており、収容者は希望すれば教誨を受けられる。信教の自由があるため義務ではない。複数人が集まる「集合教誨」と感じると話す。

と、一対一で行う「個人教誨」がある。死刑囚は相互に接触させない規定があり、個人教誨のみを実施。時間や頻度は施設によって異なる。法務省幹部は「殺人や傷害致死など、人が亡くなる罪で服役する人が多い施設では希望者も感覚的に多い。(効果は)一部の収容者にとって高